

会話中の対立を通して示される友人同士の親しさ

一聞き手のコンプレックスを顕在化させる行為への非難に着目して一

西阪 亮 (関西学院大学大学院生)

1. はじめに

親しい友人同士の会話では、しばしば「冗談」を言い、笑い合っているやりとりが多く見られる。その冗談の中でも、例えば相手を「非難」することで冗談を達成することがある。非難は相手との関係を損ないかねない危険な行為(初鹿野他 1996)であるにもかかわらず、なぜ会話参加者たちはその非難の発話をむしろ「おもしろいもの」として受け取り、笑い合うのだろうか。

これまで、上述の非難のような会話参加者間で対立を引き起こす可能性のある発話や行為が冗談となりうることを示した研究は、数少ないながらもいくつかある。それらの研究では、会話参加者たちはある対立行動を冗談として用いる際に、それが「遊びである」と相手に伝えるためのメタメッセージを送り、冗談として成立させているということが述べられている(Bateson1972)。例えば、大津(2004)は、日本語の親しい友人同士の会話で、悪口、反論、非難などを用いて相手と「遊びとしての対立行動」を行うやりとりに着目して分析を行った。そして大津は、「遊びである」と相手に伝えるためにどのようなストラテジーを用いるのかを明らかにし、会話参加者は、(1)発話の繰り返しや、韻律操作、感動詞の使用、(2)スタイル・スイッチング、(3)笑いの3つの方法を用いて対立の発話を冗談として提示していると述べている。

大津の研究では、悪口、反論、非難のような対立行動をすべて同列のものとして扱っており、その違いよりもむしろ、対立をどのように冗談として成立させるかに焦点を当てて論じられている。他方、非難は関係性の維持において最も危険な行為であると考えられるにもかかわらず、そもそも「なぜ、いま、そこで」非難がなされるのかについては明らかにされていない。人々はいつでもどこでも非難の発話ができるわけではなく、そこには我々にとって理解可能な非難をすべき合理的な理由があるはずだ。そして、その非難に至るまでのやりとりには、会話参加者や我々にとって冗談として理解可能な発話や行為の連鎖が存在すると考えられる。

以上のことを踏まえて、本研究では、親しい友人同士の会話の中でなされた非難の発話に着目し、なぜその非難が行われうるのか、そしてなぜそれが冗談として理解されるのかという2つの問いを解明していきたい。

2. データと分析の焦点

2.1 データ

本研究では、筆者が2019年8月に収録した約2時間の居酒屋での会話データを用いる。会話参加者は2人の男性GとRと、女性Sの3人である。GとRは大学時代の同級生で、SはGとRよりも3つほど年下であるが、彼らは同じサークルに所属していたこともあり、親しい関係である。

2.2 分析の焦点

今回注目する非難の事例は、右の【断片1】のようなやりとりで生じる。

47行目のSの「sonだけGさんが魅力的ってことや。」という発話は、「魅力的だ」というポジティブな評価の言葉を「Gさんが」とGの名前を主語にしていることから、Gへの褒めであると言える。その褒めを受けたGは、49行目で「もっと言って。」と褒めを受諾し、かつさらに褒めを要求するような発話で応答している。非難の発話は、その直後の「ehhe¥はらたつ:::¥ehahaha」と、「はらたつ」という怒りの感情を表す言葉を用いてGに向かってなされている。

【断片1「はらたつ」】

((Gは、今付き合っている彼女が、自分と付き合う前の彼氏と別れて自分のもとに来たということを語っている。その話を聞いていたSは、同じく話を聞いていたRに、肩を叩きながら44行目を発話する。))

44 S: (聞き)ました。

45 (0.5)

46 R: なんて::?(1.5) なんて::?

47→S: =sonだけGさんが魅力的ってことや、=

48→R: =やばいな::

49→G: もっとゆって。

50→S: ehhe¥はらたつ:[:: ¥ehahaha

51 R: [ehhe]

本研究ではこのような「褒め-褒めの受諾-非難」というやりとりに焦点を当て、会話分析の手法を用いて分析を行う。

3. 分析

上述のように、本研究における非難は褒めの連鎖の直後に生じる。分析に入る前に、褒めについて先行研究ではどのようなことが述べられているのかを概観した上で、事例の分析に移りたい。

3.1 褒めの先行研究

金(2007)は、褒めについて「話し手が心地よくなることを意図し、聞き手あるいは聞き手に関わりのある人、物、ことに関して『良い』と認める様々なものに対して、直接的あるいは間接的に、肯定的な価値があると伝える言語行動である」(p. 19)と定義している。

Pomerantz(1978)は、褒めと褒めの応答を一連の行為(action chain)として捉えて論じている。つまり、依頼に対して受諾あるいは拒否をするのと同じように、褒めに対しては受諾あるいは拒否が要求されるとし、一方で、褒めは「評価」でもあるために、同意あるいは不同意も同時に求められると述べている。また、Pomerantzは、褒めの受け手が褒めを向けられた際に、その褒めを受諾するか、受諾することによって自画自賛になってしまうことを回避するかという選択に迫られることを指摘しており、そのジレンマを解決するために、「評価対象のシフト」と「褒めの格下げ」という二つの方法を挙げている。そして、張(2014)はその二つに加え、新たに「褒めの焦点ずらし」という方法を発見している。

また、褒めの応答に関して丸山(1996)は、褒めの対象が所持物である場合、受け手はそれをあまり否定しない、あるいは受け入れることが多く、褒めの対象が才能や技量、性格などの場合には、否定する、あるいは受け入れないことが多いという指摘をしている。

これらのことから、褒め手が相手を褒めた際に、その褒めの受け手は何らかの応答を求められ、そして少なくともその褒め対象が受け手の才能や技量、性格などの場合には、受け手は拒否あるいは不同意をすることが期待されるということが考えられる。

3.2 事例の分析

3.1を踏まえて右の【断片2】を見てみよう。

01行目から08行目でGは店員と注文のやりとりをしており、SとRはその様子を見ている。01行目でGが「豚の角煮」を注文した直後、Sは03行目で「>ぜんぶ<(Sの名前)が食べたいやつ:。」とRに顔を向けながら発話し、Rもそれにならずいて応答する。そして次に04行目でGが「エイひれ炙り焼き」を頼んだ直後にはRは目を見開いて驚いた様子を表し、Sは06行目で「こうゆうところが()やで、」と言いながらRを見つつGを指さし、そして拍手をしている。このことから、Gは店員を呼ぶ前に、Sがメニューを見ながら挙げた候補を、店員を呼んで注文する際にその候補をすべて網羅して注文したということがわかる。そしてそのようなGの行動に対して、SはGをポジティブに評価するような発話をしていると考えられる。

07行目から10行目の間で店員とのやりとりが終了したことが明らかになった直後に、Rは11行目で「モテるな。」とSの方を見ながら発話する。そして、SはRの方を向き、「モテるとこやわ。」と同意を与えている。このSとRのやりとりは、この2人だけで行われているように見え、Gはその2人のやりとりを聞いている状態であると言える。しかしながら、この「モテる」という異性から好かれることを意味する言葉は、ポジティブな評価であると考えられ、その評価の対象は、先ほどの注文のやりとりから考えるにGであると言えるだろう。つまりSとRは、彼らの2人のやりとりによってGを間接的に褒めているのである。

「モテる」というのは、才能あるいは技量に対する褒めであると考

【断片2「どや顔」】

((この断片の前では、Sがメニューを見ながら食べたいものの候補をいくつか挙げていた。その後Gへとメニューを渡し、Gもメニューを見た後、店員を呼び、注文をしている。断片はその途中から始まる。))

```
01 G: で豚の角煮[:.
02 T:          [+豚の角煮::はい,+
r:          +うなずき----->+
03 S: *>ぜんぶ<(Sの名前)が食べたいやつ: +.
s: *顔をRに----->*
r:          +うなずき-->+
04 G: *エイひれ炙り焼き*で、
s: *顔R----->*横目でG->>
05 T: エイ+ひれ*炙り焼[き:.
s: ----->*顔R----->
r:          +目を見開く----->
06 S:          [こうゆうところが( )やで,*
s:          --->顔R、G指差し--->*拍手をし顔を戻す--->*
r:          ----->+
07 T:          [以上でよろし
08 [いですか?]
09 R: [はい. ]
10 T: ありがとうござい*ま:+す、
r:          +顔Sに向けて戻す
s:          *飲み物を飲もうとする-->
11→R: モテ+る な* +.
r:          +顔S--->+
s: ----->*
12→S: *モテるとこやわ*.
s: *グラスを置いて、顔R----->*飲み物を飲む-->
13⇒G: ((誇らしげにうなづく*))
s: ----->*
14⇒S: *ha [ha ha * ったつ : : *.ha:]
s: *Gを指差す->*手で口を隠す->*
15 R:          [モテポイント追加 : .]=
16⇒S: =>なんで<@ちよっとどや顔@す(h)*る(h) [ん(h).]
g:          @うなづく---->@
s:          *グラスを口に持っていく-->
```

えられる。3.1で述べたように、それらに対する褒めへの適切な受け手の応答は、拒否、不同意であるのが一般的であると言えよう。それにもかかわらず、Gは13行目でうなずき、褒めを受諾するのである。そのようなGに対してSは14行目でGを指さしながらおそらく「はらたつ」であると考えられる発話をし、さらに16行目では「>なんで<ちょっとどや顔するん。」とGのうなずくという行為を取り上げ、非難しているように見える。しかしGはそれだけで終わらず、18行目で「までもおれもうモテンでいいから。」と「モてる」ことを認めた上で、それ以上はもう必要ないということを告げる。それに対しRは目を見開き、20行目で「#ha::: #」と掠れた声を出すことで怒りを表しているような態度を見せ、Sはグラスを音を立てて置き、怒ったような表情でRの方を向き、21行目で「聞いた。」と問いかける。そして23行目で「今はケンカ売ってるやんね?」と明らかにGの18行目の言葉を取り上げ、それに対して非難を向けているように見える。

このように、SとRの2人、特にSがGに対して非難を行う理由は、まずGが褒めに対して拒否、不同意を行い、謙遜するという社会的な規範から逸脱している点が挙げられる。このことは、Pomerantz(1978)が褒めの受け手が褒めを受諾、同意した際に、その次の位置で褒め手はそれを指摘すると述べていることから支持できるだろう。

しかし、彼女らが非難する理由はそれだけではない。46行目以降のやりとりを見てみよう。ここまでGへの非難のやりとりが一通り終わった後、50行目でRは「でももう:この二人に言う:言葉ではないよな、今はな、」と発話し、「この二人」つまりSとRに対して、Gの発話は言うべきでないことであつたと述べる。Sもそれに同調しており、51行目でRの言葉の末尾と重なるように「ないわな、」と述べ、続いて52行目で「優しくないよな、」とさらにGを非難するような発話をし、RもSの「優しくない」という非難に53行目で同意している。これらの発話からわかるように、「モてる」Gと異なり、SとRは「モてていない」者としてふるまっている。また、背景的な情報を含めて述べるならば、Gには最近恋人ができた一方で、Rは最近恋人と別れ、Sは片思いをしていたがそれを諦めている。つまりこのGとSとRの3人は、「恋人がいる」Gと「恋人がいない」SとRという二極化された関係にあると言える。そして断片以外の会話では、SとRは彼ら自身のことを「失恋組」と呼んでおり、「恋人がいない」ことを自虐的に述べ、ネガティブに評価している様子が見られる。そのような彼らが、Gを「モてる」とポジティブに評価することは、「恋人がいる」Gを優勢側に置き、「恋人がいない」自分たちを劣勢側に置くという行為を達成していると言えるだろう。そのように考えれば、「恋人がいる」優勢側に対して「恋人がいない」劣勢側が褒めるという行為は、彼らの中の「恋人がいる」ことに対するうらやましきのようなものを垣間見ることができないだろうか。さらに劣勢側が自分たちの「恋人がいない」という状況を自虐的に捉えていることから、彼らは「恋人がいない」ことをコンプレックスとして抱えているようにも見える。そんなSとRからの褒めを、Gが認め、ましてや「必要がない」とまで言うことは、GとS、Rの優劣を明確にし、その両者の差を広げ、溝を深めるという配慮の欠いた行為であると言える。SとRが怒りを表し、Gを非難する合理的かつ適切な理由はそこにある。

3.3 冗談であること

彼らのやりとりが冗談であることは、彼らの発話の仕方や、身体的な動作の観点から明らかである。なぜなら彼らの会話における非難とその前後のやりとりに着目すると、例えば、Gの13行目のうなずきが顔のにやけとともに何か誇らしげに見えることや、SとRの反感を買うきっかけとなったGの18行目の発話がにやけを伴っていること、さらに、13行目に対してSがGを指さして音声的な笑いを伴いながら非難したり、18行目に対しても顔のにやけを伴って非難していることから、彼らは本気で相手を貶めようとしたり、あるいは本気で相手を非難しているようには見えないからである。そし

```

17 R: [nhuhuhuhu]
18⇒G: までも@おれもうモテンでいい@から.
      G: @顔左----->@顔 SR、にやつき-->
      S: ----->
19 (0.5)@ +(0.4)
      G: --->@
      S: ----->
      R: +目を見開く->
20⇒R: # . *h a @+ : : * : : #
      R: ----->+顔 S----->
⇒S: --->* *グラスを音を立てて置く->*顔 R-->
      G: @飲み物を飲む----->
21⇒S: 聞いた.
      R: ----->
      S: ----->
      G: -->@にやけながら SR->
22⇒R: .khi@:::#+今は: あのは: ' =
      R: ----->+
      S: --->* *顔 R----->
      G: -->@
23⇒S: =今はケンカ売って[るやんね? ]
      S: ----->*
24 R: [+今- ]
      R: +カメラを指差しながら顔 S-->
25 R: 今撮ってる[から:]
      R: ----->
26 S: [uhaha]ha [ha]
27 G: [ha]
28 R: [*¥カ]ツトして:+¥
      R: ----->+顔 S-->
      S: *笑いながら手を叩く-->
29 R: hehehehehe* [he ]+
      R: ----->+
      S: ----->*
      ((中略: 30~45))
46 R: =モテンでいいからってことはも:
47 S: いるから.
48 R: いるから.(0.7)また-たしかに(0.7)そら大事.
49 (1.5)
50 R: 'でも'もう:この二人に言う:言葉ではないよ[な、今はな、]
51 S: [ないわな、 ]
52 優しくない[よな、]
53 R: [優しく]なかったな、
54 R: >それは<あの:マイナスポイント.

```

て、24、25行目のRの発話によって、Sが声を出して笑い、Gも笑っていることから、このやりとりが3人にとって「おもしろもの」として扱われていることが理解可能である。

これらの事実は、大津(2004)で述べられていることと合致し、彼らは「遊びとしての対立行動」を達成していると言える。しかし、彼らのやりとりが冗談に見えるのはそれだけではないように思われる。ここでまず押さえておきたいことは、彼らが親しい関係にあり、断片や、断片外の会話、またはそれ以外の交流で、Gには恋人がいて、SとRには恋人がいないということを、3人の間で共通に知識として持っていることである。そのことを踏まえて、もう一度断片の11行目から23行目までのやりとりを見てみると、SとRによる褒めをGが顔のにやけを伴って受諾することは、「恋人がいない」2人を、「恋人がいる」Gが、その知識を用いてSとRの「恋人がいない」という状況をからかっているように見えまいだろうか。千々岩(2013)では、会話の相手が嫌がるものをからかいの資源として利用するという、相手に関する知識を利用したからかいの事例について論じており、上述のからかいはそのような事例と類似するものであると考えられる。そして、そのGのからかいに対し、SやRが怒りを表したり、Sが非難したりすることは、Drew(1987)のからかいの受け手によるまじめな応答(Po-faced receipts)に通ずるものであると考えられ、SとRはそうにふるまうことによってからかいを否定し、自分たちの正当性を主張している。他方、彼らは笑っていることから、それが「おもしろいもの」としての理解を示している。つまり、Gのからかいは、SとRにとってもからかいとして理解されていると言える。

4. まとめ

本研究では、親しい友人同士の会話で起こる冗談としての対立を見るために、優劣のつく話題の中で生じる「褒め－褒めの受諾－非難」の連鎖に着目した。そしてなぜそのやりとりで非難が起こり、他方で冗談として理解可能なのかという疑問を解明してきた。そこで明らかになったのは、(1)非難は、褒めに対して謙遜するという社会的規範から逸脱している点、褒めの受諾によって優劣をはっきりさせ、聞き手との溝を深めるといふ配慮の欠いた行為をしている点で適切となること、(2)会話参加者たちは、笑いなどのメタメッセージを用いて冗談を成立させているとともに、褒めを受諾する側は相手に関する知識を用いてからかいを行い、非難する側はそのからかいに対してまじめに応答するという、からかいの連鎖を達成していたことである。

このようにして、本研究で登場した会話参加者たちは冗談の対立を遂行しているのだが、その対立を通して彼らの「親しさ」が示されているように見える。なぜなら、Bateson(1972)が「対立を否定することで親しさを表す」と述べているように、「逸脱－非難」、「からかい－非難」という対立関係が笑いや身体動作によって否定されているからである。さらに彼らが共有知識を用いてこのやりとりを行っていることも、彼らの親しさを表す証拠となっている。そしてそれを冗談としてお互いに理解していることから、Brown & Levinson(1987)が「冗談は話し手と聞き手が共通の背景知識や価値観を強調するものである」と述べているように、彼らは、冗談としての対立を通してお互いの「背景知識や価値観の強調」、つまり、親しさを示し合っているとと言えるだろう。

参考文献

- Bateson, G. (1972) *Steps to an ecology of mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- 張承姫 (2014) 「相互行為としてのほめとほめの応答－聞き手の焦点ずらしの応答に注目して－」『社会言語科学』第17巻 第1号 pp. 98-113
- 千々岩宏晃 (2013) 「「からかい」の相互行為達成：「あなたに関する知識」を用いた発話の一用法」『日本語・日本文化研究』23 pp. 129-141
- Drew, Paul (1987) ‘Po-faced receipts of teases.’ *Linguistics*. 25. pp. 219-253.
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 (1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向－日本語母語話者と日本語学習者の比較－」『日本語教育』88 日本語教育学会 pp. 128-139
- 金庚芬 (2007) 「日本語と韓国語の「ほめの談話」」『社会言語科学』第10巻 第1号 pp. 18-32
- 丸山明代 (1996) 「男と女とほめ－大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析－」『日本語学』第15巻 第4号 pp. 68-80
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス－遊びとしての対立行動に着目して－」『社会言語科学』第6巻 第2号 pp. 44-53
- Pomerantz, Anita (1978) ‘Compliment Responses: Notes on the co-operation of multiple constraints.’ Jim, Schenkein (Ed.) *Studies in the organization of conversational interaction*. pp. 79-112. New York: Academic Press.